

特別講演

「今改めて、動物を飼育することの意義を考える」

無藤 隆 先生

(白梅学園大学子ども学部名誉教授)



本日は、学校飼育動物ということよりもっと広い視野で、考えたいと思います。これから皆様方と一緒に考えたいのは、人間にとっての動物の意義、と言うと少し大げさかもしれませんが、現代の生活において、動物がわれわれ人間にとって、どのような位置づけにあるのかということです。学校で、モルモットやウサギなどを、飼育小屋やケージなどで飼育することは、私は望ましいことだと思っています。動物はいろいろな場面で人間とふれあう機会があり、その代表が家庭であるわけで、家庭でのペットの飼育数はおそらく増えてきているのではないかと。しかし、必ずしも子どものいる家庭で増えているわけではないと思います。というのも、私と同年代の人たちが、犬や猫を飼うことが増えていることを実感しているからです。一方で、動物園や水族館なども、一定の集客を行っており、栄えているのではないかと感じています。これですべてかと言え、すべてではありません。われわれが生きていくためには、動物を食する必要がある、食物としての

動物の位置づけがあります。したがって、愛玩する動物と食する動物が存在するわけです。また、草むらなどには、バッタなどの昆虫もいるわけで、子どもたちはそれを採集したりもします。昆虫ということ考えると、私などは好みませんが、家庭にいるゴキブリなども存在するわけです。人間も正確に言えば動物の一種であり、様々な動物と共生しています。その共生のあり方が、時代により様々に変化してきています。それをこれから数十年単位で見て、どのようになっていくのか考えていかなければならないと思います。その際、われわれの価値観や感性などの変遷もともに考えていく必要があります。

そう考えてみると、人間と動物を完全に切り離して考えることはあり得ないことになります。人類の歴史を考えると、狩猟の時代、農耕の時代には、家の周りに今の犬に類した、すなわちオオカミのような動物がいて、どの程度かわかりませんが、人類と共存し始めたのではないかと思います。一方で、ゴキブリやネズミなどは人類に益をもたらしましたが、人類の周りにはかならず存在していました。このように、人間の周りには、様々な動物が存在していたわけです。これからの人類を考えると今後どうなっていくのかを考えてみましょう。たとえばゴキブリとの共存を避けたいと思っても、ゴキブリやハエなど、人類が避けたい動物を完全に家の中から追い出すこと

は不可能です。しかし、細菌などについては、衛生的にしておけば、ある程度は排除することはできます。ただ、常在菌などは完全に排除してはいけないようですが。また、人間どうしの触れ合い方も変わっていくのではないかと思います。現代を考えると、満員電車のように、常に人間どうしが密着している状況に耐えていかなければなりません。今後何十年か何百年か経つうちに、そのような状況も解消されていくかもしれません。人類どうしが、皮膚と皮膚を触れあわせていくことを、どこまで維持していくのか、いろいろな動物と一緒に生活することをどこまで維持していくのか、どのような関係が望ましいのか。というとても大きな問題があります。まずは、このような状況を丁寧に見ていく必要があります。その中で、学校飼育動物をどのように位置づけていくのかを考えていく必要があります。

生態学的システムの把握とは

- ▶ 物・生き物（動植物）・人の相互的な関係が相互依存的相互維持的に機能する。
- ▶ 個物はその居場所の中にある。
- ▶ その物は多数のものとながかり、それが相互的で連鎖的である。
- ▶ 連鎖は時間的に変異し、ダイナミックな変遷をもたらす。

生き物・物・人との関わりの中で

- ▶ 動物を支える自然とは、植物があり、砂や土や水がある。
- ▶ それぞれへの関わりが生き物への関わりを基盤にある。
- ▶ その関わり方は多様な遊び方・使い方である。

ということで、基本的なところに入っていきたいと思います。このような問題は、やはり環境的なことから考えていく

必要があります。最近の言葉で言えば、SDGsのようなことです。問題が大きくなりすぎても困りますので、少なくとも視野に入れるべきことは、生態学的システムというものを意識することです。はっきりしていることは、動物は単体で存在することはないということです。動物は、何かを食べ、どこかの場に暮らしています。そう考えると、動物は植物なしには生きていけません。このような相互連鎖的なことをとらえていく必要があります。このことは、野生的になればなるほど明確になってきます。動植物が暮らす場を分類するとすれば、野生と準野生になります。いずれにいたしましても、そのような動植物たちは、相互依存的な関係にあります。我が家では、プランターにアサガオを植えています。アサガオが生活するためには、空気、水、土が必要なわけで、そのアサガオを目当てとして、たぶん、小さい昆虫などが来ているのではないかと思います。このような関係は、いろいろなところで見られます。このように、身近なところでも、生態学的なシステムがつくられています。また、このような小さな生態学的システムと、別の生態学的システムをどうつなげていくのかという問題があります。動物園での展示の問題では、見る側が楽しいと思うと同時に、動物に対しても苦痛を与えない工夫が必要とされます。たとえば、旭山動物園の例が有名です。ここでは、動物にとって比較的自然に起こる行動を重視した展示をしています。昔の私の教え子に、動物園での飼育について研究している学生がいて、私も旭山動物園のことについて学ぶことができました。ということで、少なくとも、日本の動物園で

は、飼育の形態が変化しつつあることが事実です。しかし、動物園ではどうしても人間に動物が見られるということは避けることができません。このことを解消するためには、完全な野生の状態を再現し、そこで動物を飼うことにしなければなりません。ただそうすると、動物が隠れて出てこなくなってしまうという問題が生じます。ということで、なかなか難しい状況が生じてしまいます。つまり、動物が人間と共存する場合、準野性的な環境で飼育せざるを得ないということです。これが一つの解決策になります。極端な見方をする人がいて、人類がいなくなるからこそが、動物が幸せに暮らせるようになるための解決策だと言います。あるいは、食物としての動物のことを考えた場合、動物に苦痛を与えないとするならば、完全な菜食主義者になる必要があります。そのような考え方をする人たちもいます。今、このことが良いとか悪いとかを申し上げたいのではなくて、準野生の中にも、小さな生態学的システムが存在していることは事実です。たとえば、この大学の構内にも並木がありますが、並木は人間の目にとって心地よく映るということだけではなく、そこには、様々な昆虫などが生息していて、小さな生態学的システムが存在しているのです。私は以前、秋葉原の小学校に関わったことがあるのですが、そこで、たとえば柑橘類などを育てると、秋葉原のような都会であっても、そこにちゃんとトンボなどの昆虫が集まってきます。また、この大学の周辺でも、小さな木立がたくさんあり、チョウなども飛んできます。このようなことを考えると、生態学的システムは、バラバラであるようで、ちゃんとつ

ながっていることを実感します。同時に、そこにかかわっている人間の目線で考えてみると、こちらの生態学的システムで出会うこと、あちらの生態学的システムで出会うこと、それぞれがつながりをもって見えてくるわけです。

私は、動物飼育を推進したいと考えているわけですが、たとえば、幼稚園の敷地内に、木立や草むらなどが生えている場を用意するだけで、そこにいろいろな動物が集まってきて、生態学的システムが構築されます。このようなところで子どもたちが出会う動物と、飼育動物とがつながり合うこと、また、動物園で動物に出会い、これと飼育動物がつながり合うこと、このようなことが、子どもたちにとって必要なのではないかと思います。こうすることにより、動物たちを支える植物、植物を支える土壌など、いろいろな関わりに、子どもたちは気づくことになります。そのほかにも、園庭の砂場ではそうはいきませんが、河原の砂地や浜辺の砂などを掘ってみると、いろいろな生きものが出てきます。このように、様々な場所で感じられる生きものどうしのつながりを感じさせることが、子どもたちにとって必要なことであると考えます。

生命への関わり

- ▶ 命あるものは生まれ、育ち、亡くなるものである。
- ▶ 生き物にはそれぞれ独自の動きがあり、諸感覚へ感じるところがある。
- ▶ 生き物への独自の共鳴がその基盤となる。

そのような中で、動物の命がなくなると、人間は「死」を強く意識することになります。そうすることで、逆に、生も

生き物としての人間

- ▶ 人間は生き物であり、独自の動きと感覚をもっている。
- ▶ 他の人もその人間に対して身体と感覚を通してつながる。
- ▶ 人間は生まれ、生き、亡くなる存在である。

意識できるようになります。魚には魚の、亀には亀の独特な動きがあり、そのようなことを見たり、あるいは抱いたり触ったりすることで、生を感じることができるようになります。また人間も動物の仲間ですので、人間の「生」にもつながれるようになります。もちろん、このような感性は変わっていくのかもしれませんが、たとえば、犬型ロボットなど、これは生きものではありませんが、高齢者などにとって、心の癒やしになっているということもあります。このように、他を慈しむ気持ちがどのように変化するのはわかりませんが、確実に言えることは、犬型ロボットが壊れても、それは壊れたということであって、「死」とは言えないわけで、動物にふれあうことは、いずれ死に出会うことになります。そして、死に出会うことは、生に出会うことにもなります。子どもの教育のことを考えても、死に出会わせることは、非常に重要なことであるわけです。人間として生きていくからには、人間を生きものである

人間の仲間としての動物

- ▶ 人間は他の動物と連続的につながる。
- ▶ 人間は進化の過程において、動物として淘汰されてきた。
- ▶ 人間の文化はその動物としてのあり方を変えつつ、その広がりを可能にした。
- ▶ いくつかの動物種は進化の中で人間の仲間（コンパニオン）であり、あり続けるだろう。
- ▶ 食としての動物について、畏敬の念を持つ。

と感じられないようでは困るわけです。そのことを、もっと如実に感じさせることができることが、動物飼育であると言えます。人間は、その歴史の中で、様々な動物たち、たとえば、馬、羊、牛などを仲間としてきました。最近の愛玩動物にしてもしかりです。このような動物たちと人類が、つながり合っているということを、いろいろな場面で子どもたちに確認させることが必要です。一方で、食するということの対象としても、動物たちは大切な存在であることも確認させる必要があります。このようにしてわれわれは、動物たちと共存しているということなのです。

学校で飼育することの意義

- ▶ 誰もが接し、世話し、愛着を感じ合う。
- ▶ 長期間関わることに意味がある。
- ▶ 日々接するようにする。
- ▶ 世話し、遊び、観察し、調べなど多様な活動が伴う。

さて、学校飼育動物の問題に目を向けてみましょう。この会場にお越しの方々は、日々動物たちの面倒を見ることが当たり前であるとお考えであると思います。これは、ただ見ているということではなく、遊んだり、観察したり、世話をしたりする。このことによって、動物たちを「生きもの」としての対象と見ることができるようになります。しかし、様々な幼稚園・保育園・小学校などを見ると、なかなかそうもいかないところも多くあります。学習指導要領上では、生活科において、動物を飼育したり植物を栽培したりすることが明示されています。このことは、そうすることが義務づけられているということです。ただ、動

愛すること、寄り添うこと、世話をすること、そして慕われること

- ▶ 子どもが好きになれる動物を選ぶ。
- ▶ 諸感覚が多様に感じられる。
- ▶ 動物の世話や関わりはその生態のあり方に寄り添う必要がある。
- ▶ ゲージや飼育小屋などで可能な範囲で動物の特徴を知って、生かす。
- ▶ 時間の経過によりその変遷や成長を感じる。
- ▶ 関わる人間に対して応答的に振る舞い、なつくことが望まれる。

物というのは、ザリガニでもダンゴムシでもバッタでも良いわけで、それらを捕まえてきて、短期間飼育し、また自然に離しても動物を飼育したということになります。それはそれで、前述いたしました生態学的な場を意識することにおいては、意味のあることです。一方で、ウサギなどの愛玩動物を学校で飼育するということにおいては、その動物たちとふれあうことで温もりを感じることが出来ます。ただ、このような哺乳類を継続して飼育することについて、たくさんの問題点があり、その解決方法はこの研究会においても長い間議論されてきたことです。そこで、愛玩動物を飼育対象とすることは、個人差はあれ、多くの子どもたちがそれらの動物を好きであるということに意味があります。すると動物たちを見ているだけでなく、実際に動物に触るという、動物たちとふれあう行為が生じます。そうすると、動物たちの世話をし、たとえば餌や水をあげたり、糞の掃除をして飼育舎を清潔に保ったり、このようなことをすることを通して、動物たちの生態学的な位置づけを感じられるようになります。さらに、ある程度の時間を経ることで、赤ちゃんが生まれたり、死んでいったりすることを目の当たりにします。このことによって、生物というものが時間を経るごとに変遷していくことにも気づきます。また、人間たちののは

たらきかけに応じて、動物たちが応えてくれるようにもなります。これは、やはり金魚や亀などに比べると、哺乳類の方がより強い反応をしてくれます。ただ、学校で飼育する場合においては、犬などのように個別に愛着を示すような動物、猫などのように移動が激しすぎる動物は、適当ではありません。このようなことが明瞭化されてきたことが、本研究会の活動の一つの成果であろうと思います。また、スライドの表題にも書きましたが、「愛すること、寄り添うこと、世話をすること、そして慕われること」についてですが、多くの子どもは、家族がいればそれで十分な面はあると思います。しかし、子どもが自分よりも弱い立場の動物の世話をし、ふれあうことで、動物たちが慕ってくるような体験が必要です。これは、高齢者においても同じことが言えます。また、動物の世話をすることに対して、子どもたちが他に表現することによって、動物たちとの関わりをより深くしていくことにもなります。本研究会を立ち上げた方は、獣医師の故中川美穂子さんです。中川さんは、大学院で学校飼育動物と子どもたちの関わりについて研究されていて、その一つとして、子どもたちの作文を取り上げるものがありました。その研究で、日常的に動物を飼育している学校の児童の作文と、そうではない学校の児童の作文では、動物の

関わりを表現する

- ▶ 動物と関わることを言葉・文章・絵などに表現することが関わりを深くする。
- ▶ 表現は具体的個別的でその時に感じたことを大切にす。
- ▶ 表現の巧みさではなく、自分の思いや考えを展開する場とする。



心情や生態などの描写を比較した場合、まったく異なっているという結果になったということでした。そういう意味で、動物を飼育し、世話をしていくことは、子どもたちの表現の豊かさにもつながっていくということであると思います。

さて、そろそろまとめに入りたいと思います。まずは、最初の方にもお話ししましたが、動物を人間社会の中できちんと位置づけていくことが大切であるということです。最近では、動物を家庭で飼育する家庭も増えてきているようですが、問題なのは、そうではない家庭の子どもたちです。そのような家庭の子どもたちは、往々にして、動物を怖がったり、不衛生なものとして見てしまう傾向にあります。やはり、園や学校において、継続的に動物たちとふれあわせていくことが大切になります。また、生態系に目を向けると、自然界には様々な動植物が生

息していて、そのような動植物とのふれあいにおいて、生態学的システムを理解していくことも大切です。そして、このような場を、子どもたちにいつ、どのような形でもたせていくかを考えることがとても重要なことです。

人形から生態へ

- ▶ 可愛いだけの存在に限定せず、その様々な種の多様なあり方へと目を開く。
- ▶ 一つの動物の背後に多種多様で大小様々な動植物や土壌などの存在があることを知る。
- ▶ 自然界の多様な種のあり方を知る。
- ▶ 生活の場における各種の生き物を知り、共存のあり方を探る。

最後になりますが、動物をただかわいがるだけでなく、その動物の背後に、多種多様で大小様々な動植物や土壌などの存在を意識させることが大切です。仮に、ケージの中で動物を飼っていたとしても、その動物に与える餌はどのようなものなのか。その餌はどのようにして育ってきたのか、そのような背景を一緒に考えさせることが大切なことです。また、森や海辺に出かけていき、そこに様々な動植物が相互依存しながら生活していることを感じることも大切なことです。つまり、家庭でのペット飼育や学校で動物を飼育することにおいて、そこに生態学的システムが備わっていることを、いかに子どもたちに伝えていくことができるか、そして今後、生態学的システムという大きな枠の中で、動物を捉えていける社会を作り上げていくことが重要なことだと思います。そのような大きな流れの中で、学校飼育動物や、そこに教師や獣医師などが関わっていく方向性を見出していけると良いと思っています。

社会の中に動物との関わりを位置づける

- ▶ 学校・子どもが動物と関わる活動をその後に展開する機会を設ける。
- ▶ 家庭などのペットとのつながりを考える。
- ▶ 社会全体での動物への関わりやその利用のあり方から共生と自然維持についてを学ぶ。